

事業成果報告書

団体名：大仙市教育委員会

<研究課題>

- B. 保護者や地域住民など学校関係者との連携、協働の推進に関する実践研究

1. 事業の実施報告

(1) 実践研究のねらい

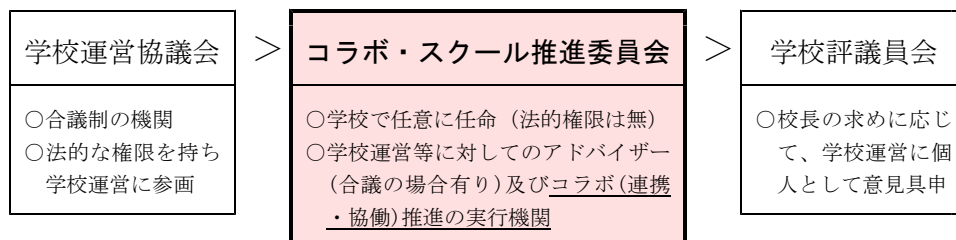
本市では、太田地域を研究指定地域（研究拠点校：太田南小学校）とし、保護者や地域住民などの学校関係者との連携、協働を一層推進するため、以下の実践研究を進めた。

- ① 「コラボ・スクール推進委員会（以下、C・S推進委）」による、実効性の高い学校関係者評価（あきた型学校評価）についての実践研究
- ② 域内小・中学校の共通課題解決に向けた連携・協働についての実践研究
- ③ 効果的な情報提供の在り方についての実践研究

(2) 実践研究の実施状況

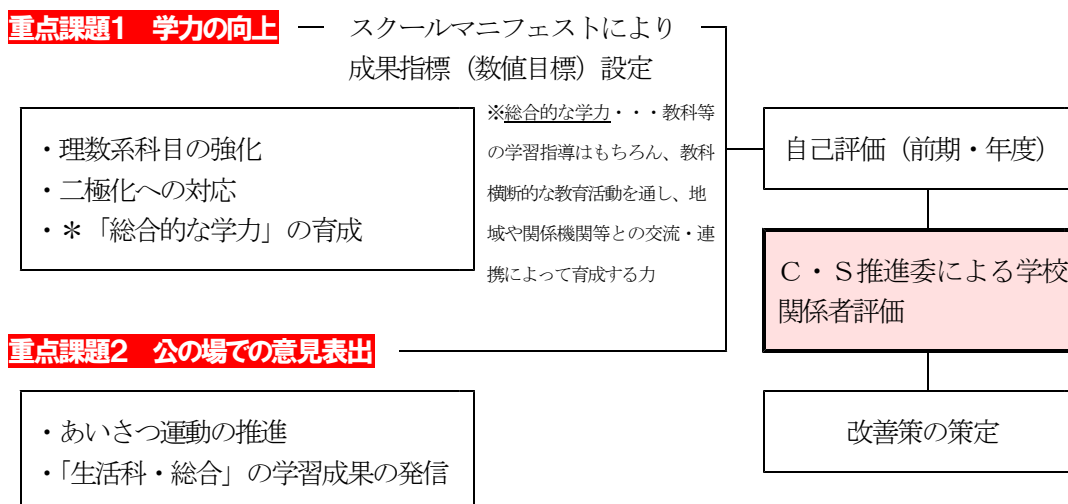
- ① C・S推進委による、実効性の高い学校関係者評価（あきた型学校評価）について（拠点校研究）

ア コラボ・スクール推進委員会の趣旨のイメージ図



※C・S推進委は、いわば「学校評議員会」以上、「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」未満のスタンス

イ C・S推進委による学校関係者評価（あきた型評価）フロー図



ウ C・S推進委による「あきた型学校評価（重点課題1 学力の向上）」の実際

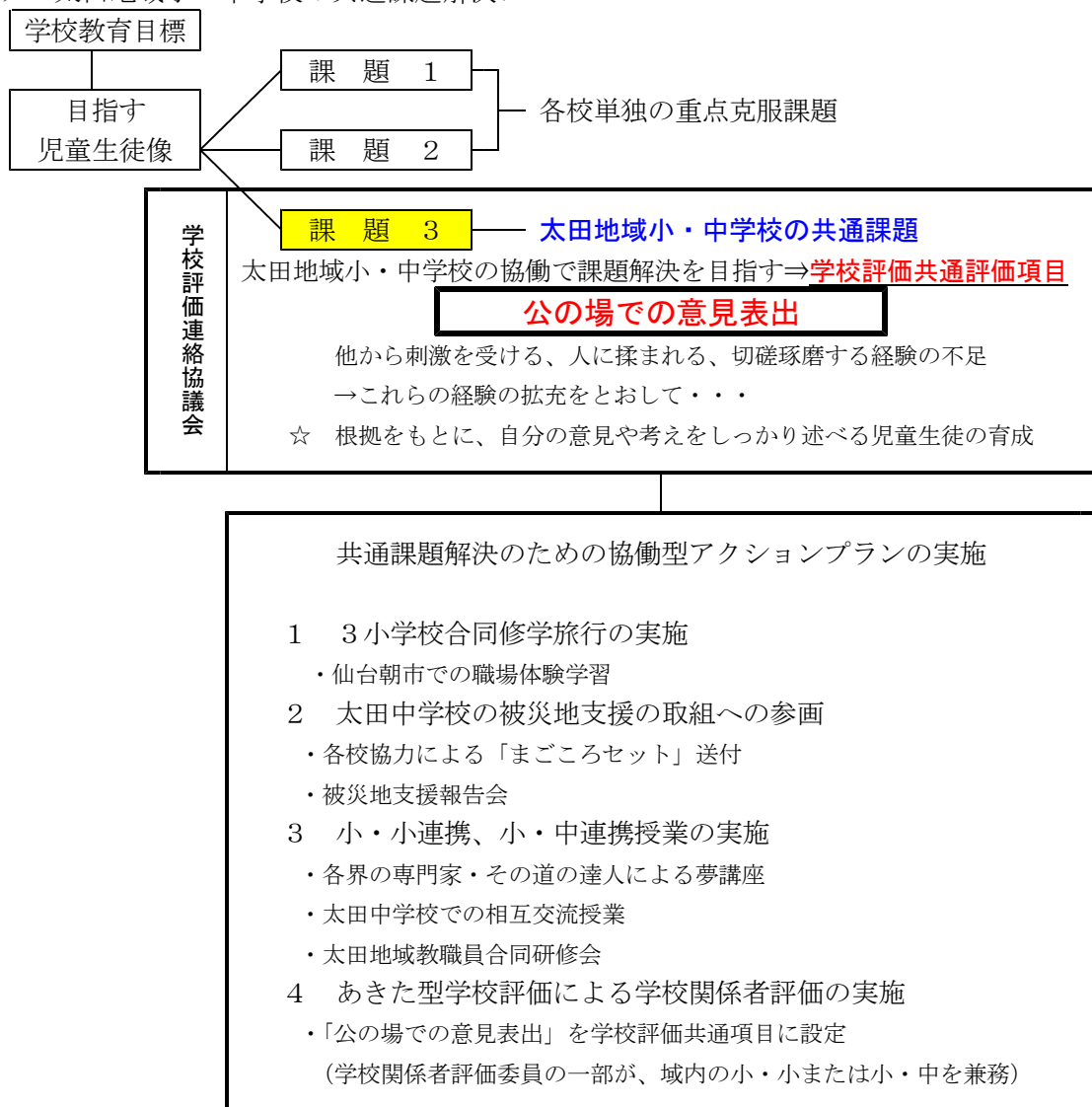
重点課題	学力の向上	P															
具体目標	県学習状況調査の本校平均が、県平均を1.5ポイント以上上回る。																
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・理数系科目に弱点がある。 ・上位層と下位層の二極化が見られる。(しかも、下位層が厚い二極化) 																
目標達成のための方策	<ul style="list-style-type: none"> ・理数系科目の強化のため、「問題解決的（探究的）な学習」スタイル及び「協同的な学習」スタイルの定着を図る。 ・二極化に対応するため、少人数学習を充実強化する。 																
具体的な取組	<ul style="list-style-type: none"> ・スクールマニフェストによる成果指標（数値目標）の設定 ・指導のガイドライン「あかまつスタンダード」の共通実践 ・「あきた型算数授業」の共通実践及びあきた型スタイルの他教科への波及 ・5・6年算数での「コース別学習」の大幅導入 ・全職員体制による「フォローアップ月間（年3回）」の実施 ・小・小連携、小・中連携授業の実施 ・秋田大学等との連携授業（訪問・出前） 	D															
達成状況	<p>1 H24 県学習状況調査結果</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid #00a0e3; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">本校平均と県平均の差の推移 (4～6年合計)</p> </div> <div style="border: 1px solid #00a0e3; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">現6年生の経年変化 (県平均との差の推移)</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid #00a0e3; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">現5年生の経年変化 (県平均との差の推移)</p> </div> <div style="background-color: #ffff00; padding: 5px; width: 45%;"> <p style="text-align: center;">Q 分からないことも、自分の力で答えを見つけられるよう勉強したい。</p> </div> </div> <p>2 スクールマニフェスト成果指標の達成度（抜粋）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 50%;">成果指標</th> <th style="width: 10%;">今年度実績</th> <th style="width: 10%;">達成度</th> <th style="width: 10%;">前年比</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>県学習状況調査通過率の平均（4～6年）が、県平均を1.5ポイント以上上回る</td> <td style="text-align: center;">+8.0P</td> <td style="text-align: center;">AA</td> <td style="text-align: center;">↗</td> </tr> <tr> <td>算数単元テストの定着率平均が、県平均を2.0ポイント以上上回る</td> <td style="text-align: center;">+0.5P</td> <td style="text-align: center;">B</td> <td style="text-align: center;">↗</td> </tr> <tr> <td>理科単元テストの定着率平均が、県平均を2.0ポイント以上上回る</td> <td style="text-align: center;">+1.9P</td> <td style="text-align: center;">B</td> <td style="text-align: center;">↘</td> </tr> </tbody> </table>		成果指標	今年度実績	達成度	前年比	県学習状況調査通過率の平均（4～6年）が、県平均を1.5ポイント以上上回る	+8.0P	AA	↗	算数単元テストの定着率平均が、県平均を2.0ポイント以上上回る	+0.5P	B	↗	理科単元テストの定着率平均が、県平均を2.0ポイント以上上回る	+1.9P	B
成果指標	今年度実績	達成度	前年比														
県学習状況調査通過率の平均（4～6年）が、県平均を1.5ポイント以上上回る	+8.0P	AA	↗														
算数単元テストの定着率平均が、県平均を2.0ポイント以上上回る	+0.5P	B	↗														
理科単元テストの定着率平均が、県平均を2.0ポイント以上上回る	+1.9P	B	↘														

	児童授業アンケートで授業満足度、93%以上	96.8%	A	↗		
	5・6年算数授業でのコース別学習の実施率、30%以上	69.7%	AA	↗		
	外部人材等との「コラボ学習」の実施回数、12回以上	12.3回	A	↗		
	フォローアップ学習の実施回数、24回以上	29回	A	↗		
	<p>3 保護者による学校満足度調査結果</p> <p>・学校での教科の指導について分かりやすいと言っているか。 86.6% (+7.6P)</p>					
教職員による自己評価	(前期)	(根拠)				C
	B	<ul style="list-style-type: none"> ・全国学力・学習状況調査結果をみると、特に算数において二極化の傾向、どちらかという下位層が厚い二極化の傾向が見られた。下位層の一定の底上げを図ると同時に上位層のさらなる進展を図るためには、TT授業だけでは限界がある。 				
	(年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・重点克服教科であった算数と理科は、県学習状況調査における県平均を上回り、おおむね良好な結果だった。また、5・6年生算数・理科の経年変化を見ると、どちらも右肩上がりになっており、改善傾向が見られる。 ・後期の5・6年算数は、全時間「コース別学習」としたが、算数の好結果はその成果と考えられる。 ・社会も順調に伸びており、「問題解決的(探究的)学習」スタイル及び「協同的な学習」スタイル定着の成果と考えられる。 ・国語が下降気味である。特に長文の読解に課題がある。 				
C・S推進委員による学校関係者評価と意見	(前期)	(意見)				C
	A	<ul style="list-style-type: none"> ・下位層の底上げのほかに、「伸びる子をもっと伸ばす」ということにも目を向けていると感じる。 ・二極化に対応するためには、TT学習ではなく、習熟度別に分けたコース別学習をもっと行った方がよいのではないかと。 				
	(年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・弱点であった算数と理科が順調に伸びている。算数はコース別学習の成果がはっきり出ている。「問題解決的(探究的)学習スタイル」定着の成果か、算数に付随して他教科も伸びている。 ・学力がアップしたのは、子どもたちが家庭学習の仕方を身に付けたのが大きい。「家庭学習の手引き(第3版)」の発行が効果的だった。 ・国語が下降しているが、辞書を引くなどして「自分の力で調べる」活動を充実させたい。また、読解力の向上は、やはり読書がカギと考えられる。 				
自己評価及び学校関係者評価に基づいた改善策	<ul style="list-style-type: none"> ・次年度は、「問題解決的(探究的)学習」スタイル及び「協同的な学習」スタイルを継承しつつ、国語を主な研究・研修教科と設定しながら、読解力の向上に向けて各教科・領域等において言語活動の一層の充実を図る。(NIEを導入する。) ・読書環境の充実に向けて、学校図書館の機能を充実させる。「調べ学習」に対応した蔵書を増強するほかに、図書館ボランティアの導入などにより児童が「足を運びたくなる図書館」へのリニューアルを図る。 					A

[評価基準] A：具体的な活動がなされ目標を達成できた B：具体的な活動はなされているが、目標は達成できていない C：具体的な活動がなされておらず、目標も達成できていない

② 域内小・中学校の共通課題解決に向けた連携・協働についての実践研究（指定地域研究）

ア 太田地域小・中学校の共通課題解決フロー



③ 効果的な情報提供の在り方についての実践研究（拠点校研究）

ア 紙媒体による情報提供

- ・ コラボ・スクール通信「あかまつ」、家庭学習のてびき（第3版）の発行
- ・ スクールマニフェスト、コラボ・スクール成果報告リーフレット、ハグロトンボ生息分布調査パンフレット、資源回収チラシ等の市広報折込による学区内全戸配布
- ・ あいさつ運動ポスターの学区内掲示
- ・ 「わたしたちのまちは こんなまち」ポスターの校内掲示

イ 電子媒体による情報提供

- ・ ホームページ、緊急メール送信システム活用による学校情報発信
- ・ 高松市立太田南小学校への「太田のお宝DVD」送付

ウ フォーラム・報告会等による情報提供

- ・ 「学校・地域の連携フォーラム」での実践発表
- ・ PTA学習参観の際の「中間報告会」、「成果報告会」の開催
- ・ 「大曲仙北生活科・総合的な学習研究大会」の開催
- ・ 「うしくサイエンスフェスタ2013（茨城県）」での環境学習の成果発表

エ その他の情報提供

- ・学校フリー参観週間「みんなの登校日（年2回）」の実施
- ・全国紙地域版や地元紙への記事掲載（投げ込み）
- ・「太田のお宝ティッシュ」による情報発信
- ・来校者へ「太田南小特産干しシイタケ」プレゼント

④先進校視察（平成25年1月28日（月））

○仙台市立将監中央小学校

視察者：太田南小学校（校長、教頭）

大仙市教育委員会教育研究所長

視察内容：授業参観及び「協働型学校評価」の取組について

2. 実践研究の成果

(1) C・S推進委による、実効性の高い学校関係者評価について

① 学校関係者評価の実施主体の機能化について

C・S推進委の委員は、学校評議員、保護者、地域住民等（8人、うち2人は太田中の学校評議員を兼務）で組織したが、学校運営や教育活動等への意見具申にとどまらず、ある時は「地域サポーター」として自らコラボ学習やコラボ活動に積極的に参画するなど、「連携・協働の実行機関」の性格も併せもたせた。そのことが、学校に何度も足を運び教育活動等に直に触れる機会の創出につながり、委員には学校運営や教育活動等への意見具申に対して、当事者意識の高まりが見られ、より実効性のある学校関係者評価につなげることができた。また、委員からは小・中9年間を見通した子どもの姿についての意見が出されるようになった。

② 目標の共有について

「あきた型学校評価システム」を導入し、目標の重点化と数値化を図り、それをスクールマニフェストに示して学区内に周知（市広報折込で全戸配布）したことにより、学校が向かう方向性や当該年度で解決すべき重点課題、課題解決のための方策等を、学校の教職員と保護者、地域住民で共有することができた。

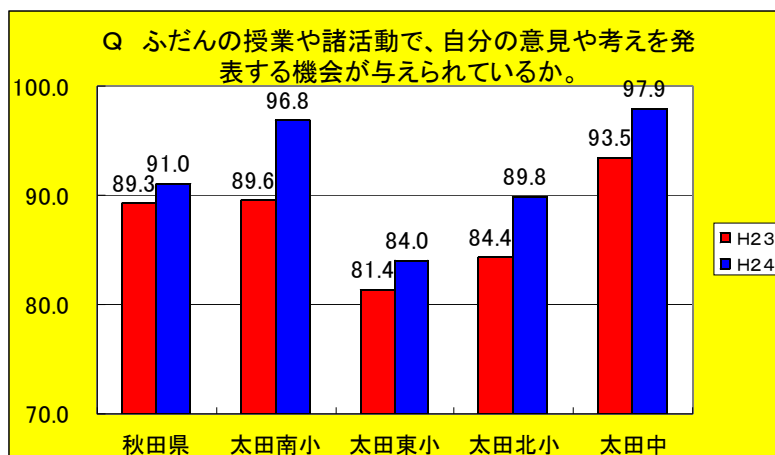
*あきた型学校評価システム詳細 <http://www.pref.akita.lg.jp/www/contents/1214807855480/index.html>

③ 教職員のチームワークの高まりについて

学校運営の全分野を網羅し総花的に設定した評価項目についてチェックする形から、あきた型学校評価にシフトし、目標を絞って重点化し、成果指標（数値目標）を設け、さらに、教職員の人事評価システムの自己目標とも連動させながら目指すべきゴールを明らかにしたことで、その達成に向けた教職員のチームワーク（組織力）の高まりを見ることができた。

(2) 域内小・中学校の共通課題解決に向けた連携・協働についての実践研究について

太田中学校区の共通課題は、「公の場での意見表出」であった。そのため、「学校評価連絡協議会」を設け、各校の学校関係者評価委員（拠点校では、C・S委員）の一部が小・小または小・中を兼務するなど、学校間の様子やつながりが見える体制を整えた。そして、「公の場での意見表出」を各校の共通評価項目とし、課題解決を目指した協働型アクションプランを立案・実施した。



そのことにより、「公の場での意見表出」に係る各校の質問紙調査結果（H24県学習状況調査）は、上図のとおりとなった。自分の意見や考えを、根拠を基に述べる児童生徒が同

地域において増加していることが見て取れる。この変容は、同地域の協働的な取組の成果といえる。

また、学校関係者評価委員の一部が複数校を兼務したことにより、同地域の小・中9年間を見通した「目指す児童生徒像」が明確となり、学校関係者評価の実効性を高める効果があった。また、兼務した委員は、各校の強みや弱みを把握しながら、連携・協働のコーディネーター的な役割も果たすようになるなど、副次的な効果も生み出すことができた。

(3) 効果的な情報提供の在り方について

拠点校では、紙媒体及び電子媒体、報告会・フォーラムを開催するほかに、新聞等のメディアも活用しながらあらゆる機会を通じて学校運営・教育活動等の情報を学校外へ発信した。その結果、保護者・地域住民に対して行った学校満足度調査の情報提供に係る質問項目では、91.1%が肯定評価だった。(前年比5.9%アップ)これは、紙媒体・電子媒体とともにフォーラム等の開催、新聞等のメディア活用、学校フリー参観日「みんなの登校日」などの取組が、相乗的に機能し合った結果と考えることができる。

また、拠点校ではホームページでの情報発信により、県外からの学校視察もあった。

3. 今後の取組予定

本市では、太田地域での実践研究の成果をリーフレットにまとめるとともに、教育委員会のホームページに掲載し、広く市民に向けて発信する予定である。

また、今後市内の他地域の小・中学校にも実践研究の成果を波及させることにより、学校評価及び情報提供の実効性を高め、連携・協働をキーワードにした地域とともにある学校づくりを一層推進していきたいと考えている。